知恩の人

藤井 慈等

発行元：首都圏大谷派開教者会

知恩の人

藤井 慈等

目次

三帰依文 …… 3

知恩の人

首都圏開教 …… 4
母への反抗 …… 6
「君は生きとるんか、動いとるんか」 …… 8
無価の宝 …… 12
連れ合いの死 ― 彼女のお念仏 ― …… 15
仏さまを踏み付けにして歩いている …… 20
大悲 ― 安危共同 ― …… 22
「地獄を見せて去られた仏さま」 …… 25
御恩が大き過ぎて見えない …… 28
私どもから離れない仏さま ― 如来 ― …… 32
言葉にまでなった仏さん …… 37
知恩 ― 本当の人間の生活 ― …… 39
あとがき …… 42

三帰依文

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

首都圏開教

首都圏大谷派開教者会の報恩講に、ようこそお参りいただきました。ご苦労さまでございます。狭窄症をやりましてから足の具合が悪くて、座らせていただきます。ご無礼をお許しください。

真宗会館の場で、開教者のお寺のご住職さん、そしてご門徒の皆さんがこうして年に一度報恩講をお勤めくださる。そのご苦労のほどを、こうして皆さんのお顔を見せていただきながら、しのばせていただいておるようなことです。

一九六二(昭和三十七)年に※同朋会運動という信仰運動が真宗大谷派に発足し、それと併せて、当時の※宗務総長でありました※訓覇信雄という方が首都圏開教ということを大きく立ち上げてくださって、それからが始まりかと思います。

もちろんそれまでに地道な開教に携わってくださる先達がいらっしゃったに違いないと思います。そういうことがなければ、一九六二年に「首都圏開教」という言葉は出てこなかったに違いないと思います。そういう意味では、東京に親鸞聖人の南無阿弥陀仏の道を求める先輩方がいらっしゃったんだなと、そんなことを思うことです。

私は三重県の松阪市から参りました。松阪市と名乗っていますけども、昔の郡部で、山の中でございます。それこそ今、花粉ですっかり参っておるのですが、杉と檜の山の中にお寺がございます。昔は、杉鉄砲を作ったりして杉と一緒に遊んでいたのですが、今はアレルギーに悩まされている、そんな時代になりました。東京もおそらくこの地はどちらかというと山に近いんじゃないでしょうか。そういう意味では、この時代の悩みを抱えながら聞法されているのかなと思います。

※同朋会運動
一九六一(昭和三十六)年の親鸞聖人七〇〇回御遠忌を機に、一九六二(昭和三十七)年に発足し展開する真宗大谷派の信仰運動。発足当初、親鸞聖人の教えに帰ることを願いとし「家の宗教から個の自覚の宗教へ」との転換が提起された。

※宗務総長
宗教法人真宗大谷派の代表役員。真宗大谷派の最高議決機関である宗会において指名される宗務機関(教法宣布・儀式執行の実務組織)の長。

※訓覇信雄(一九〇六～一九九八)
三重県出身。真宗大谷派の僧侶。一九六一(昭和三十六)年真宗大谷派宗務総長に就任。曽我量深や安田理深とともに信仰回復のため教学推進の運動を展開。同朋会運動を提唱し、宗門改革に邁進した。

母への反抗

「知恩の人」というテーマでお話しいたします。「恩を知る」という「知恩」です。このたび講題を求められて、親鸞聖人のご生涯はいったいどういう言葉でいただけるかなと、「知恩」という言葉で表すことができるのではないかなと、そんなことを改めて考え、この題にいたしました。

皆さんは恩という言葉にどんなイメージが湧くでしょうか。あまり使われなくなってきている時代ではないですか。「恩着せがましい」とか、「恩に着る」とか、どちらかというとマイナスの意味で使われることが多いでしょうか。大きなご縁をいただきましたということを表わす「おかげさまで」という言葉が、だんだん死語になる時代だなと思います。

私は※大谷大学にはご縁がなく、お寺に生まれたにもかかわらずお寺に謀反を起こしまして、宗派の大学には進みませんでした。そういう意味では、謀反の「おかげ」であらためて親鸞聖人に出遇わせていただいたなと思います。今年で七十六歳になるのですが、謀反の「おかげ」というものがあったと思います。

私はこうして親鸞聖人の教えにご縁をいただきましたが、皆さんはお父さんとかお母さんに謀反を起こしませんでしたか。一九五〇(昭和二十五)年、私の父親は四十二歳で早くに亡くなったものですから、母親が以来二十年ほど住職の代務を務めておりました。現在では女性住職がずいぶんたくさん誕生しておりますが、当時は今のように女性が住職になれなかった時代でした。子どもを三人かかえて苦労の多い生活でした。にもかかわらず、母親に反抗していたのです。今、母親が出てきたら、合わせる顔がないなという思いがいたします。

当時は母親の姿を見ていますと、どうしても死者の供養をやっている、生きた人間の仕事をして

※大谷大学
一六六五(寛文五)年に東本願寺内に創設された学寮が基となった親鸞聖人の思想に立つ宗派立の大学。一九〇一(明治三十四)年に前身である真宗大学が東京巣鴨にて開校。一九一三(大正二)年京都洛北に移転し、現在に至る。

いないと、そういうイメージで母親を見ていたんです。小学校、中学校、高校までずっとです。それが大きな間違いであったことに気が付きますのに、ずいぶん時間がかかりました。

ですから、私は生きた人間の仕事をしたいなと思いまして、ならば芸術だなと。子どもの選びですね。それで早稲田大学に入って、演劇の勉強をしていたのです。卒業はしたのですが、そういう仕事がなかなかなくて、お寺でぶらぶらしていた時代がありまして、それがご縁で東本願寺のご本山、※宗務所に就職いたしました。それが一九六八(昭和四十三)年です。

「君は生きとるんか、動いとるんか」

本山で働くようになって宗務総長であった訓覇信雄という方に出遇い、この方のお話を聞くご縁がありました。以来、亡くなりますまでご縁がありましたが、今もって響いておりますのは、「君は生きとるんか、動いとるんか、どっちやねん」という問い掛けでした。そのときに言葉が出なくて、脇から冷や汗が出る体験をしました。生きているのか、動いているのか、どっちだ。皆さん、どうお答えになりますかね。

私たちは耳に聞き慣れている言葉ですが、「往生」という言葉がございます。生まれて往く。どこに生まれて往くのか。浄土に生まれて往く。だから、生きるといったときには方向がございますが、動いているといったときには、ちょうど時計の針が回っていますが、あの針のように動いている。そういう人生じゃないかと問い掛けられたのでした。

更にもう一つありまして、「君のようなのを仏法のセールスマンというんだ」と。聞いて覚えてはいるが、仏法を食べていない、仏法で生きていないと

※宗務所
宗教法人真宗大谷派の事務所。宗派の最高議決機関である宗会において認められた施策(宗務)を実施する機関。京都の東本願寺(真宗本廟)境内の宗務所の約三百人に加え、日本各地の教務所や海外開教区で二百人以上の職員が勤務している。

いう意味です。

私は、まだ「真宗」というものに出遇っていないときに、こちらの度肝を抜かれるような質問をされまして、そのときに初めて気づいたのです。浄土真宗という教えは、私が考えているような教えと違うんだなと。

私が本山に勤めましたときは、ちょっとご奉仕に行ってこようかなとふらりと行った感じでした。私に使命があって入ったのではありませんでした。昭和四十三年ですから、同朋会運動が始まって六～七年目の、第二次五ヵ年計画に入ったころです。宗務所は、一に信心、二にも信心、「マイホーム」はお寺から去れという時代でした。「マイホーム」というのは、お寺を私物化しているという意味です。そして、入所した年代ごとに聞法会(仏法を聞く集い)がありました。これが私の考えている真宗と違いました。

私がお寺に育ってきたイメージからすると、ひたすら亡くなった人の供養をしに来ているとしか、門徒の方々の姿を私は見ていなかった。お説教を聞きに

みえる方々の姿は、南無阿弥陀仏の教えを聞く姿だということには全然気が付かなかった。その意味ではご門徒さんのお姿を見ながら育ってきましたが、その辺がずれていました。

仏法を聞くというのは、浄土の教え、如来の本願を聞くこと。浄土の教えを聞くということは、この我が身に教えてもらわなくてはいけない、そういうことに気が付き出しました。

もちろん自分では気が付きませんよ、生きているつもりですから。「動いているだけと違うか」「動いているときには、死ぬとは言わないのだ。壊れると言うのだ。壊れる人生だ」と言われました。宗務所に勤めて感じたのですが、聞法している人の姿勢は、やはり生き方、生活の姿勢が違うんですね。

聞くという言葉は皆さんも聞き慣れているでしょう。「聞く」というのはこころを開かれる体験です。だけども、こころを開かれるといっても、それはいかにこころを閉じているかということを知らされることです。こころ開かれてい

る人に出遇えないと、こころ開かれる出遇いは起こらないですね。最初からこころを開いているようなつもりをしていますから。善人なんですよ。「悪には迷わないんだ、善に迷うんだ」ということを、僕は先輩から習いました。「善悪」の迷いの深さという問題です。

無価（むげ）の宝

もうお一方、本山に勤務しはじめた折に出遇うことのできた方がおられました。前住職であった父の師でもあり、また友人でもありました正親含英（おおぎがんえい）という先生です。父が京都で亡くなりますとき、「息子のことを頼みます」と託された方が正親先生なのだと、母からよく聞かされておりました。

宗務所に入って間もない頃、宗務所の廊下を歩いておられる老人がありました。先輩が「あの方が正親先生だ」と教えてくれました。私は思わず正親先生を

つかまえて、「私は藤井碩含（せきがん）の息子です」と自己紹介を致しましたら、先生はしばらく沈黙なさって「君が、碩含さんの息子か」とはらはらと涙を流されました。

そして「君はMさんと競争してはいけませんよ」という、私にとってこれは何だろうという、首をかしげるような言葉をくださいました。実は、Mさんは当時私の隣町のお寺の住職で、大谷大学の先生をしておられました。後にも先にも、正親先生にお会いしたのはこの時だけでした。翌年、先生はお亡くなりになられました。

その後、今日までよく愛読していますのに正親先生の『真宗読本』という本がありますが、最近その本の「第七章念仏の歩み」の中にある「無価（むげ）の宝」という言葉に出遇いました。少し読ませていただきます。

「念仏ぐらい申してどうなるか、何にもならないではないかと見られる念仏でもある。また、それなればこそ、ありがたくも尊い。何かになり何かであるのが貴いのではない。何にもならない何でもないと見ゆるものに、まことの美し

さ尊さがある。子が母をよぶことは、何でもない、何にするものでもない。けれど、それなればこそ、母の名は貴くもしたわれる。何かになるのならば、それだけに限定せられるであろう。どれだけかの役に立つものならば、それだけに限られる。どれほど高価でも価(あたい)がつけられれば限りがある。価がなければ無価の価として限りない価をもつ。念仏は無価の宝にも等しく、無用の用としてはたらくのである。何でもない凡人が、何でもない念仏を申して、何でもないものに落ち着いて生死して浄土に帰する法が真宗の教かもしれない。何でもないものになることは、賢(さか)しらの人間にとって、そんなに容易なことでもない。何かであろうとし、何かであることを主張してやまないものが、何でもないものに落ちつき、何を主張する要もなく、与えられたるままに満たされゆける法が念仏の法でもあろう。」(正親含英著『真宗読本:正親含英文集Ⅰ』法蔵館一二五頁)と、こういう文章です。

「無価の宝」という言葉は、親鸞聖人がお使いになっている言葉ですが、よくわかりませんでした。しかし、先生の言葉を通し、また先生と同じ歳になって、

何かしら初めて頷けるものがあります。役に立つこと、貢献することがもてはやされて、役に立たないものを自ら排除し、また排除される時代なればこそ、ただ今生きてあることにこそ、無用の用、無価の宝としての意味があるということを、数限りない念仏者が「凡夫」に帰って呼びかけていてくださる。

五十年前、一度だけお遇いした正親先生が、私を見て流された涙と言葉は、何かになろうとして小賢しく力んでいた、この私にくださった「まこと」の言葉、お念仏であったのだと、やっとその遺言のようになったその心が半世紀も経ってようやく聞こえてくる。そういうことがありました。

連れ合いの死 ― 彼女のお念仏 ―

こちらへ伺います前にお葬式をお願いされまして、一昨日に枕経とお通夜を済ませ、昨日の朝に出棺勤行をさせていただいて、お葬式は娘の婿に任せてこ

ちらに参りました。今日の法話のお約束をしたものですから、すっぽかすわけにはいきません。昨日のお葬式は喪主さんにご無礼してきました。

私は三重県の山の中のお寺をお預かりしていますが、隣もその隣も住職がいらっしゃらない寺院なのです。そういう意味でいうと、東京も開教ということが願われる歴史を持っているわけですから、ある意味では住職がいないということでしょう。今、開教者の皆さんのご苦労と、どんどん人がいなくなっていく私の山のお寺も、状況は同じです。開教の姿勢ということが求められるのです。

そういう意味では、やはり入り口はお葬式です。つまり、死者がいなければ私が死ぬものだということは考えもつかないのです。

七年前の二〇一二(平成二十四)年に私の連れ合いが亡くなりましたが、四、五年前にここ真宗会館のお彼岸会でそのことをお話しするご縁がありましたので、その時と同じような話になるかもしれませんが、お聞きいただきたいと思います。

五十年近く住職を務めておりますから、沢山の亡くなった人のお顔を見てきましたが、私が死ぬとはなかなか思わないんです。他人は死ぬけど、わしは死なんと思うています。だけど、連れ合いのときには大変重い宿題を残してもらいました。そういう意味では、皆さんと今の立場は一緒です。

亡くなります三年ほど前から、顔面神経痛だなと言って顔をゆがめて神経内科に通っていました。そうしたら、そんなのではなくて肺がんから脳に転移していたんです。病院通いと入院の間、一緒に顔を合わせるという時間が多うございました。

私だけではお寺の仕事もあってとても追い付きませんので、三人の娘にそれぞれの仕事を休んでもらったりしながら四人で、もちろんお医者さんと看護師さんとも、みんなで総掛かりの看病でした。

亡くなりますひと月くらい前でしょうか、妻は「私はケア病棟に行くから」と言って、自分で選んで移りました。だんだん薬も効かなくなっていましたから、看護師さんたちになぜて(「なでる」の方言)もらうとか、私たち家族がシーツで

体をゆすって痛みを紛らわせるというところまでいきました。最後は、お釈迦さまではありませんが、足も自分で動かせないから動かしてくれと言って、私や子どもの手を借りて動かすという状態でした。

そんな中、亡くなります一週間ほど前に、大きな声で突然「侮(あなど)っとった」と叫んだのです。侮るというのは、我が身を軽く見ていたという意味かなと思ったんです。そうでなければ病気を侮っていたというのかなと思いました。大きな声で「侮っとった」と。

いずれにしても、軽蔑していたということでしょう。まさか私のことを軽蔑していたというわけではなかろうと思いますが、「侮っとった」とひと声言ってそれからものを言わなくなりました。その言葉にこの七年間、ずっとつかまれっぱなしなんです。

連れ合いと私は何十年も生活を一緒にしてきたのですが、初めて彼女のお念仏に出遇ったのだなと思ったんです。南無阿弥陀仏だったんだということを、

ようやく気が付きました。つまり、我が身というのは思いどおりにならないんですが、思いの向こう側に我が身の事実がある。老いて、病んで、死ぬ、というこの身は、私たちの思いの自由になりません。

私の地方の方言かもしれませんが、老いてきますと「御院さん、私もあかんものになってな」と言うんです。「あかんものになった」というのは、役に立たなくなってきたということです。老人会という組織がありますし、町も市も挙げて老人を大事にしましょうということで敬老の日を設けていますが、本当に老を敬っているか、老いる我が身に頭が下がっているか、そんなことを思います。私も七十六歳で後期高齢者です。六年前に狭窄症の手術をしたときには、にっちもさっちも動けなくなりまして、そのときに「御院さん、私もあかんものになってな」という言葉に共感を覚えました。本当だなと。

だけど、「あかんものになった」というときには、必ず「あく」「あかん」という物差しがあるはずです。役に立つ、役に立たないという物差しです。今の時代

で人をはかる物差しは何でしょうか。力でしょう。体力、学力、経済力。国を挙げて「力の出る日本」と言いますが、本当の力、生きる力とは何なんだろうかということを考えさせられます。

仏さまを踏み付けにして歩いている

「侮っとった」というのは、初めて思いの向こう側にある我が身の現実に出遇った言葉だったんだなと気付いたんです。宿業（しゅくごう）の身、宿業因縁だということです。「業縁（ごうえん）存在」。もっと平たく言うと、我が身の事実。私たちは、他人や自分を見るときには、「私」という思いではからいますよね。そのことにも気が付かないほど、「私」というものがよりどころになっている。私でいえば、連れ合いが亡くなると「私の妻が亡くなった」となる。「私の子ども」「私の寺の門徒」。親鸞聖人の門徒なんて思わないですよ。みんな「私の」が付くんです。そうすると、みんな物

になるんです。私の思いが主人公ですから。

ちなみに神さまも仏さまも、お参りする対象になりますと、「私の」目的をかなえるために使っていることになります。どうか幸せになりますように、病気になりませんように、家内安全でありますように、と。それは信仰の問題じゃなくて人間の欲望でしょう。それが悪いということではないですよ。信仰という衣を着て、そういうことを仏さまや神さまにしてしまうのは、我々の「私」という思いじゃないでしょうかね。そういうことを教えられてきました。

「業縁存在」とは人間存在ということです。ご本山で先輩に勧められて読んでおりました※曽我量深（そがりょうじん）先生の本の中に、「私どもは仏さまのおつむりの上を歩いております」とありました。おつむりというのは頭のことです。赤ちゃんをあやすときに「おつむてんてん」と言いませんでしたか。これは、私たちは仏さまの頭の上を踏

※曽我量深（一八七五～一九七一）
新潟県出身。真宗大谷派の僧侶。大谷大学教授、大谷大学学長を歴任。清沢満之の「精神主義」の伝統に立ち、真宗教学の近代化に功績を遺す。

み付けにして歩いている、ということです。

私が主人公であります限りは、仏さまというのは、はるか向こうにいらっしゃる存在になってしまって、「私」とはつながらない。実体化という問題です。私はずっとそういうふうに見てきたんです、子どものころから。お寺に生まれていましたが、なかなか仏さまということがわからなかった。

大悲（だいひ）―安危共同（あんきぐどう）―

報恩講では「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし　師主知識の恩徳も　ほねをくだきても謝すべし」（「正像末和讃（しょうぞうまつ）」『真宗聖典』五〇五頁）と和讃をお勤めします。仏さま、如来とは、大悲のこころです。なぜ大悲なんでしょう。悲というのは、引き裂かれることです。つまり、痛みです。曽我先生は、「私どもは、仏さまのおつむりの上を歩いております」とおっしゃった。仏さまの頭の上だと。しかし、それにもかかわらず仏は衆生を見捨てないのです。踏みつけにしている衆生の「安危を共同する」と教えていただきました。それを大悲というと。

それは、親で考えるとわかりやすいでしょう。人間が誕生する、つまり赤ちゃんが生まれますとお母さんが誕生する。それまでは、お母さんはいないのですね。去年の八月、末娘に赤ちゃんが生まれまして、私も病院までお見舞いに行きましたが、赤ちゃんを抱っこした娘の姿を見て、ああ、お母さんが誕生したんだと。親が誕生するというのは、ちょうど仏さまの願いが誕生するのと同じです。「私が母さんだよ」と言うときは、お母さんは何の答えも要求はしないですよ。赤ちゃんのいのちと一つになったんです。

大悲とはそういうこころです。本願の名告（なの）りは、私たちの方からは手が届かない、私の思いからは気が付かない。仏さまの方から呼び掛けてくださるんです。呼び掛けの声が仏さまなんです。「私」という思いに立っているぞ、我が身の事実に出遇っていないぞと。

ですから、曽我先生は「私どもは如来から信ぜられております」とおっしゃる。私どもを信じてくださる仏さまがこの阿弥陀さまです。こちらから信じる以前に、私どもを信じてくださいます。親鸞さまは「決定深信乗彼願力」（「愚禿鈔」『真宗聖典』四四〇頁）と言われます。

曽我先生は続けて、「私どもは如来から信ぜられております。如来から信ぜられておりますから、如来を信ずることができる。如来を信ずるときに、自分を信ずることができるのであります」と。ごっついですね、これは。親鸞さまの「決定深信自身」（「愚禿鈔」『真宗聖典』四四〇頁）ですね。

それまでは、私の妻、私の子ども、私の体。いのちも「私の」いのちと思っているんです。いのちよりも「私」が大きくなっているんです。ですから「おかげさまで」なんてことは思わない。俺がおまえの面倒を見てやっている、というわけです。

そういう意味では、お母さんとかお父さんと呼べるのは、親不孝な者しか呼べないのではないでしょうか。いかに謀反を起こしていたか。そのことに気付

くときと、「お母さん」と名を呼ぶときは、一緒のときなんです。それを、「今日」、「現に」、「ただ今」、「一念」という言葉で教えてくださる。「信に死し、願に生きよ」という曽我先生の言葉がございまして、これは分別に死んで如来の願いに生きるということですが、如来の願いに生きるということは、そのまま我が身の事実に立ち上がっていくということでしょう。どえらい教えですね。

「地獄を見せて去られた仏さま」

一九九八（平成十）年に蓮如上人の五〇〇回※御遠忌がございまして、そのときに同朋会運動を推進してくださる、そういうお役目を担っていただくご門徒の方々を推進員と呼び、同朋会運動という運動の中で念仏者が誕生してきました。

※御遠忌
宗祖親鸞聖人と中興の祖（第八代）蓮如上人の遺徳を讃えるために、五十回忌以降に五十年毎に勤められる法要。

その方々が、蓮如上人五〇〇回御遠忌の※お待ち受けのときに、ご門徒の集いがあり、そこで推進員の代表が話してくださいました。これにはもう感銘を受けました。『真宗』という宗派の機関誌に載せていただきましたので、公になっているお話です。ですから、ひょっとするとお聞きになっている方もおありかもしれませんが、こんなお話です。

お父さんのご縁で仏法を聞くようになったAさんという方のお話です。Aさんのお母さんが痴呆症になって、兄妹三人が看護するんです。私の姉弟もたまたま三人でしたが、私の母は膵臓がんで亡くなりました。脳にまで転移していたということで、ずいぶん大変な状態でした。このAさんのお母さんは痴呆症だったということですけれども、私はそんなものにならんぞと思っていますが、わかりませんね、業縁存在ですから。

それで、Aさんが痴呆症になったお母さんに、「いいかげんに死んでくれ」と言ったんです。そして、やがてお母さんが亡くなり、お通夜の晩に兄妹三人が寄って

「やれやれ、もう通うことはいらん」と話し合っていたと言われました。つまり、痴呆症の母親の看護から解放されたというわけです。

Aさんは、お父さんのご縁で聞法、南無阿弥陀仏のいわれ、法を聞くという歩みが始まっている人でしたので、お手次のご住職から弔電が届いたそうです。今では住職は弔電なんて出しませんね、お悔やみを伝えるくらいです。あるいは枕勤めに参って、枕元で「ご苦労さまでした」と頭を下げるくらいです。

そのご住職さんの弔電には「お母さんは、老いた身をあげて、精いっぱい私たちの中にある地獄を見せて去られた仏さまである。そう思われませんか。先に逝かれたお父さんは、おまえ、ご苦労だったと迎えられたでしょう」とあったそうです。

よそからみれば、痴呆症の母親を看護して親孝行な人だなとなるでしょうが、当の兄妹三人は「いいかげんに死んでくれ」と言っている。私たちは、

※お待ち受け
御遠忌をお迎えするにあたり、先んじて勤められる法要。御遠忌に向けてのお待ち受け期間はさまざまな施策が行われる。

自分で自分のことが役に立たないと感じたときには、「もういいかげんに死ぬかな」という思いになったりするのかなと思いますがね、どんなもんでしょう。

いずれにしましても、私の地獄を見せてくださった仏さまじゃないか、老いという姿を通して私の本当の姿を見せてくださった。「いいかげんに死んでくれ」「やれやれ」と言う本当の姿を見せてくれた。つまり、縁があればいかなる振る舞いもしますよと。これが我が身の事実だと。そういう意味で「この弔電によって、お母さんすまなんだ、ありがとう」と。「そこではじめて私は人間になれたのだと思います」という感話でありました。

御恩が大き過ぎて見えない

「人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く」という三帰依文の言葉でこのお話を始めましたが、受け難いこの身を受けた。文字通り、我

が身に合掌するということです。

昨日の葬儀でも息子さんの姿を見ていますと、お父さんが亡くなって、初めて手を合わせることが始まったんだ、頭が下がる世界があることを教えられるんだと思いました。合掌から、礼拝から始まるんです。

※天親菩薩が書かれた『浄土論』に、「正信偈」と同じような「願生偈」（「無量寿経優婆提舎願生偈」『真宗聖典』一三五頁）という偈がありますが、そこではお念仏を五つに分けて説いておられます。その最初が礼拝、手を合わせることです。

ただ、※曇鸞大師のお言葉に「礼拝はただこれ恭敬にして、必ずしも帰命ならず。帰命は（必ず）こ

※天親菩薩
世親とも呼ばれる四～五世紀ごろの古代インドの僧侶。親鸞聖人が浄土真宗における祖師と仰いだ七高僧（龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空）の一人。『仏説無量寿経』のおこころを「願生偈」に始まる『浄土論』として著し、念仏こそが真実であることを明らかにされた。親鸞の「親」は天親の一字をいただいたとされる。

※曇鸞大師（四七六～五四二）
親鸞聖人が浄土真宗における祖師と仰いだ七高僧の一人。天親の『浄土論』を注釈した『浄土論註』を著し、念仏一つに五念門（礼拝・讃嘆・作願・観察・回向）の意義を明らかにされた。親鸞の「鸞」は曇鸞の一字をいただいたとされる。

れ礼拝なり。」（「教行信証　行巻」『真宗聖典』一六八頁）とありますように、手を合わせていても、礼拝は必ずしも帰命（きみょう）ではない。手を合わせていても、頭が下がるということにはならない。頭が下がるときには必ず手が合わさる、我が身の事実に出遇うということです。

そういう我が身が見えませんときは、善悪の価値観ですね。親鸞聖人は、本当に善悪の物差しで悩まれたんだろうなと思います。おそらく比叡山は駄目で、法然上人はいいと、そういう物差しにも出会っていると思います。だけど、晩年になりますとそうではないですよね。やはり自力修行といって、一生懸命に修行に励むというのも人間のたどる道なんです。教えられないとわかりません。

そういう意味では、あらゆる事柄が如来の大悲のこころに出遇う出来事になってくる。如来大悲といっても、法然上人に出遇わなければおそらく気付かなかった世界でしょうね。「本師源空（ほんじげんくう）（法然上人）いまさずは　このたびむ

なしくすぎなまし」（「高僧和讃」『真宗聖典』四九八頁）という詩までつくっていらっしゃいますから。

ちょうど空気みたいなものです。宮城顗（みやぎしずか）先生は「おかげさま」ということについて、私たちは自分の物差しに合ったときにしか「おかげさま」と言わないとおっしゃいました。毎日呼吸する空気は見えない、空気がなければ生きておられないのに、御恩が大き過ぎて見えない。大きければ大きいほど、御恩は見えないんだと。難儀なものですね、人間というのは。「礼拝」は「回向」から展開すると教えられますから、人は本願、仏さまの願いの中に生まれてきたのです。

夫婦もお互いに見えないのですよ。俺が、俺がという「俺が」というこころに立っているときには見えません。その「俺が」の角（つの）も、やがて折れるのですね、連れ合いが亡くなるという事実の前には。かみさんもやや折れる、私もやや折れると。受けていかなくてはいけないんですね。

私どもから離れない仏さま ― 如来 ―

受けていかなくてはいけないというのは、我が身の事実を仏さまが受けてくださっているんです。※善導大師という方は、「大願業力に乗じて、増上縁とせざるはなき」（「教行信証 行巻」『真宗聖典』一七六頁）とお示しくださいました。これが如来です。ですから、「業縁存在」といわれるときには、業縁の身そのものに力があるんです。我が身の事実をおのずと引き受けているんです。だから業力、自然力なんです。経済力とか学力とか体力とか、そういう力じゃないですね。

ちょっと難しい言葉ですが、「信仰的実存」という言葉が青春時代に読んだ※安田理深という先生の書物にありまして、私が初めて、そういうことが仏さんかと、そう思った本でした。この本は、先ほどお話ししました訓覇信雄という方がお預りされた三重県の金蔵寺というお寺の夏季講習会で安田先生がお話しになったものです。

一つは「落在せるもの」、もう一つは「如来出生の大地」という二つの講義が収まっています。「落在せるもの」とはこれは※清沢満之先生のお言葉ですね。落在とは、落第ということです。人間の知恵に落第して、我が身に落在するんです。そうすると、我が身に助かることが開かれるんです。それを受けて、「落在せるもの」が一講目にあります。

もう一つの「如来出生の大地」、これが

※善導大師（六一三～六八一）
中国の僧侶。親鸞聖人が浄土真宗における祖師と仰いだ七高僧の一人。『仏説観無量寿経』を深く学び、『観経疏』を著して、凡夫のために浄土往生の教えが説かれていることを明らかにされた。

※安田理深（一九〇〇～一九八二）
兵庫県出身。真宗大谷派の僧侶。大谷大学を辞した曽我量深、金子大榮とともに一九三〇（昭和五）年に「興法学園」にて親鸞思想を説く。同朋会運動にも大きな影響を与えた。一九三五（昭和十）年京都にて私塾「学仏道場 相応学舎」を開き、現在も聞法道場として相続されている。

※清沢満之（一八六三～一九〇三）
尾張藩士の家に生まれ、十六歳で得度し、後に愛知県大浜の真宗大谷派西方寺に入寺した明治期を代表する僧侶。親鸞思想を「精神主義」として提唱した。宗門改革運動を展開、後に同朋会運動へと発展する。仏教の近代化を推進して多くの傑出した僧侶を育成した。真宗大学（現在の大谷大学）初代学長。

「業縁存在」の意味ですね。仏さま、要するに大悲心ということは、私どもから離れない仏さまです。こういう「如来出生の大地」というお言葉に出遇いました。青春時代です。今もって、立ち帰る言葉になっています。

内容を紹介しますと「如来があって人間の大地となるというのは、人間から離れた如来でなしに」と、つまり人間を支えるものです。支えるという表現も言葉足らずでしょうか。「人間から離れた如来でなしに」「如来が人間の宿業として現象しておる」。如来が単なる人間の他者ではない、どこか私から遠く離れたところにいらっしゃるというような実体的な仏さまじゃないんだということです。「如来が単なる人間の他者で無しに人間を超えたものでなしに、人間として如来が現実性を持って来る場合は、人間の現実、宿業の現実という形を如来がとった場合が、それが〈願〉です。」（以上引用はすべて、安田理深著『信仰的実存―落在せるもの―』文明堂）というわけです。ですから、これは離れないんですね、我々を。伝統的な言葉では、人間を「機」という言葉で表します。

仏さまを「法」と表します。「御文」には「機法一体の南無阿弥陀仏」（「御文三帖目七通 三業」『真宗聖典』八〇四頁）とあります。

話を戻しますが、「知恩」というお話でした。「如来大悲のご恩、身を粉にしても報ずべし」ということは、身を粉にしない存在が、ここにいるということでしょう。如来大悲、如来大悲と言っておきながら、身を粉にしたことがない。

つまり、如来大悲というのは、絶対否定です。絶対否定ということは、絶対信頼がないと生まれてこない。ですから、私どもの宿業として如来が現実性を持ってくる場合には願だと。願いが仏さまです。同時に我が身です。

これは、もう法を聞かないとわからないですね、教えを聞いている人に出遇わないと。「まこと」に生きている人に出遇わないと、こちらがいかに不真実であるかということに気が付かない。「いいかげんに死んでくれ」とか「やれやれ」と言って、お母さんを殺し、我が身を殺してきたという現実に気付かずに流れていく。

そのことを蓮如上人は「それ、人間の浮生（ふしょう）なる相をつらつら観ずるに」（「御文五

帖目十六通 白骨」『真宗聖典』八四二頁）と白骨からの呼び掛けを聞いておられる。浮生とは立つべき大地をなくしてふわふわと水に浮かんでいくような生き方です。

冒頭で「君は生きとるんか、動いとるんか、どっちやねん」という言葉との出遇いをお話ししました。皆さんがお参りされるお葬式も同じです。亡き人をご縁にして仏法に出遇うということは、「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに」という呼び掛けをいただいているんです、お骨から。「あんたもお骨になるよ。生きとるんか、動いとるんか、どっちや」という呼び掛けなんですね。

連れ合いは坊守として、私は住職として、聞法してきたと思っていました。仏法を聞いてきたという思いに立っていましたけども、いかに我が身の事実に出遇うことが至難であることかが、「侮っとった」の一言で知らされた。初めて思いどおりにならない我が身に出遇った言葉が、連れ合いの「侮っとった」という一言でなかったかと思っています。

言葉にまでなった仏さん

私たちは、看病すれば回復するようなつもりで付き合いますね。死の縁に臨んだ人とした目で見ることを避けてしまいます。それでも、老いて病んで死ぬということは、決して役に立たずではなくて、我が身の事実です。その我が身の事実を引き受けているのが、仏さまです。業縁、この身です。そういう教えを聞いて、目が覚めていく。

曽我先生がおっしゃった「自分を信ずるときに、人を信ずることができるのであります」という言葉がありますが、その人の一生涯に頭を下げるということは、つまりそのまま我が身に頭を下げることです。人身受け難い、この身を受けました。かけがえのないこの身なのです。安田先生は「かたじけない」とおっしゃいました。

それが実は南無阿弥陀仏の世界だということです。お念仏の歴史として、す

でに私どもはその歴史の中に身を置いているんですね。その歴史の中に身を置きながら、なかなか南無阿弥陀仏が聞こえてこないんです。

先ほどお話しした正親先生が、こうおっしゃいました。「合掌礼拝には、合掌礼拝の言葉がある。それが南無阿弥陀仏であります。それは、ありがとうということにも、すみませんということにもなり、悲しみの言葉でもあり、喜びの言葉でもあります。あたかも幼い子がお母さんと呼ぶがごとく、呼んでどうなるとか、ならんとか、どうかなるから念仏申すのではなく、どうにもならないままが念仏となるのでありましょう」と。

ご飯を食べるときに「いただきます」「ごちそうさま」という言葉がありますように、「南無阿弥陀仏」という言葉があるんです。言葉にまでなった仏さんです。仏さまがここにいるといっても、どうしたらいいかわかりませんでしょう。でも、南無阿弥陀仏という言葉にまでなってくださった仏さま、そういうお念仏を申してきた人々の歴史の中に、私どもは生まれてきたんです。図らずもそういう

ご縁をいただいてきたのです。

知恩 ― 本当の人間の生活 ―

親鸞聖人のご一生、そしてその教えにふれる大きなご縁をいただいたのに、そのご恩にいかに背き続けてきたかという悲歎（ひたん）、悲しみ。お念仏は「ありがとう」という言葉にも「すみません」という言葉にもなると、正親先生は優しく教えてくださいましたが、親鸞聖人における「讃嘆（さんだん）と悲歎」です。讃嘆と懺悔（さんげ）というのは、これから始まります報恩講の御仏事、お勤めです。お父さん、お母さんのお葬式やご法事で手を合わされるでしょう。それが仏法讃嘆であり、懺悔の姿です。

そして仏法讃嘆を通して、我が身の現実に頭を下げていく悲歎、悲しみです。そこに本当の人間の生活があるんだと、そういうことを教えてくださったのが、

親鸞聖人のご一生ではないかなと思うのです。そういう意味での「知恩の人」です。

ご恩ということと同時に、いかに如来のご恩を忘れ、そしてご恩に背いているかということを、あらためて受け止め直しする日が、今日の報恩講ではないでしょうか。私は、そのようにいただいてきました。

講題を求められまして、何にしようかなと思いながら「知恩の人」といたしました。向こうから「知恩の人」と出てきたようなことです。お付き合いいただき、ありがとうございました。これで終わらせていただきます。

合掌

あとがき

本書は、二〇一九年二月二十四日、東本願寺真宗会館（東京都練馬区）で勤められた「首都圏大谷派開教者会報恩講」へご出講いただいた藤井慈等氏のご法話に、大谷婦人会会報『花すみれ』（二〇二〇年一月号）掲載の同氏のご法話を加えて再編したものです。

浄土真宗はどういう教えなのか、仏さまとはどういうことなのか。この素朴にして根本的な問いを、先達との出遇いをとおして、身近な出来事のうえに聞き直され、この身を外さず尋ねられる講師のお話に聞き入った会員の明るい顔が忘れられません。

山の中にあるご自坊と首都圏の状況を「開教の姿勢」という通底した課題といただかれ、「本当の人間の生活」のすがたを、ともに聞き開くあゆみを開教と教えてくださったように感じています。

開教者会発足三十周年を迎え、改めて当会の願いと会員自身のあゆみを確かめるべく、ここに刊行することとなりました。いまを生きる、一人でも多くの方がご味読くださることを切に願うことです。

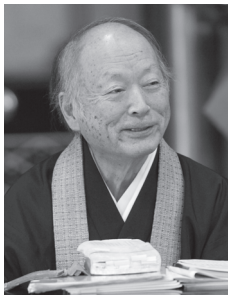
最後に、本書の発行を快くご承諾賜りました藤井慈等先生には心より感謝申し上げます。また、大谷婦人会の皆様におかれましては、当会の誠に勝手な申し出に対しまして、ご理解とご協力をくださいましたこと、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

首都圏大谷派開教者会一同

首都圏大谷派開教者会とは

当会は、首都圏で真宗大谷派寺院の建立を志す僧侶の会として一九九一（平成二）年に結成されました。葬儀や法事をとおして真宗の教えのご縁をいただいた方々との関係を築きながら、ひとりでも多くの方とともに宗祖親鸞聖人が説かれた仏教の教えにふれる場が開かれることを願い、会員それぞれが一寺建立に向けて活動しています。

毎年、東本願寺真宗会館に会員と各開教所のご門徒が一堂に会して報恩講を勤め、ともに南無阿弥陀仏の教えにあらためて向き合う大切な機縁としております。



藤井（ふじい）　慈等（じとう）

1943（昭和18）年、三重県生まれ。
早稲田大学卒業。
真宗大谷派宗務所研修部長、修練道場長を歴任。
現在、三重県松阪市の真宗大谷派慶法（きょうほう）寺住職。
主な著書に、『聞法の生活』（東本願寺出版　同朋選書46）。

知恩の人

2022（令和4）年5月1日

著　者　藤井　慈等
発行者　本多　惠昭
発行所　首都圏大谷派開教者会 事務局
　　177-0032　東京都練馬区谷原1-3-7
　　TEL　03-5393-0810
　　FAX　03-5393-0814
印　刷　株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション